

くせものがたり贅注(3)

三 沢 諄 治 郎

【第十二段】(男のよそ心を怨まぬ人妻)

○昔人の妻ありけり。其男、よそ心多き癖ありて、夜毎にいづ地とも知らず浮かれ歩きけり。さりけれど、この女いささかも怨みたる気色なく、小袖・帯剣まで、問ひ求めつつ出したててやりけり。男ふと心づきて、もし二心ありてやと疑ひ付きぬるより、例の心よしが方へ行くふりして、前裁の廁のうちに隠れてうかがふ程に、この女、かかりけりとも知らず、いと嬉しげに、男の出でしままに、はした女を呼びて、耳に口つけて物言ひければ、うけたまはりて出で行きぬ。

さればこそ二心あるなれ。なほ見あらはさばやと、よく忍びてあるほどに、暫くして端た女の後につききて男の入りきたるを見れば、常にまゐれる八百屋の翁なりけり。何やらむ物うち入れたる籠わきばさみて、つと入り来たる。あなあさまし、年は六十にこえ、齒落ち頭はげ、すすばな垂れたるを、これに見かへられぬる事のいと口惜しく、さあれば如何にすらむと、なほ堪へ忍びつつ見るに、あな心憂、恋するにはあらで、そこを焚げ、かしこに炭つけと罵りつつ、まな板の音賑はしく、

鍋どころ数多めうめうと湯けぶり立ちて、うまくさき匂ひの此所にまでくゆりて、あるじの女うち誇りつつ、手づから飯匙とりて盛り食らふありさま、余りにうち解けて、いと浅ましく、つと出でんにさへ味気なく、風吹けば沖つ白波、立てこされてはならぬと心づきしより、其の後は夜毎に出で歩かずなりにけり。

○(原注)「心よし」とは思ひものの事。鈍太郎といふ倭曲に、「下京の心よし」といへり。

○(原注)「たてこされ」の「たて」は俠者を「たて衆」といふより転じて、「たてのぼし」などいふと、ひとつつ意なり。

【注】①帯剣||外用の小脇差。(補説を見よ。)

②例の心よし||原注参照。「鈍太郎」は能狂言の名、一名「手車」ともいう。

③すすばな||水鼻汁を吸り吸り。刊本に「すすばな」とあるが「すすばな」が正しい。枕草子に「きたなげなるもの、すすばなしありく兒。」とあり。(補説を見よ。)

④めうめうと||もうもうと。煙の立ちのぼる形容。猛々の文字ならば「みやうみやう」とせねばならぬ。

⑤余りにうちとけて||無遠慮すぎて、ふしだら過ぎて。

⑥風吹けば沖つ白波||伊勢物語「高安」のくだりにある歌を借りた句で、次の「立つ」にかかる序である。(補説に詳しい。)

⑦たてこされてはならぬ。||「たて」は「たて引く」「男だて」などのたてと同意で、大ふうにはつばと出費すること。即ち濫費し過ぎてはたまらぬ。「世間妻形氣」に、「さりとて可愛い奴なれど、あの番にはたてあはれぬ。」とあるのも、出費し切れぬ、ささえ切れぬの意である。この句、忽ち口語体であるところに注意。

〔補説〕①この段は伊勢物語、第二十三段の文を地にして書いている。即ち、

昔田舎わたらひしける人の子ども、井のもとに出でて遊びけるを、おとなになりければ男も女も葎ち交してありけれど、男はこの女をこそ得めと思ひ、女もこの男をこそと思ひつつ、親のあはずれども聞かでなむありける。さてこの隣の男のもとよりかくなむ、

筒井筒井筒にかけしまろがたけ

過ぎにけらしもない見ざるまに

女かへし、

くらべこし振分髪も肩すぎぬ

君ならずして誰かあぐべき

かく云ひ云ひて遂に本意の如くあひにけり。さて年比ふるほどに、女の親亡くなりて、たよりなくなるまに、諸共に言ふかひなくてあらむやはとて、河内岡高安の郡にいき通ふ所いで来にけり。さりけれど、このもとの女、悪しと思へるけしきもなくて出しやりければ、男と心ありて、かかるにやあらむと思ひ疑ひて、前裁の内にかくれ居て、河内へいぬるかほにて見れば、この女、いとう化粧じて、うちながめて、

風吹けば沖つ白波たつた山

夜半にや君がひとり越ゆらむ

と詠みけるを聞きて、かぎりなくかなしと思ひて、河内へも往かずなりにけり。

まれまれかの高安に来て見れば、はじめこそ心にくくもつくりけれ、今はうちとけて、手づから飯匙とりて、筒子のうつはものに盛りけるを見て、心うがりて行かずなりにけり。(以下略)

②筒井筒の妻の風流さ、貞淑さに対照して、本文の女の不風流さ、意地汚なさが面白い。何れにしても男の浮気をとめた結果が同一であるところも亦一層面白い。もしこの女が、男の心を洞察して、わざとこうした芝居をうったのだとすれば、もっと面白いのであるが、恐らくそれでは穿ちすぎにならう。作者秋成の意図は、没風流な当世奥さまの姿を皮肉に描くにある。そして何時の時代にも変らぬ人根性の奥さま氣質があさましく浮かび上っている。

③秋成は、こうした実景の描写に得意の筆をもっていた。八文字舍流

の二作は暫くおき、兩月物語のそこそこ、本書第二十一段、大阪長町裏の写生文の如きは、幾度読んでも倦かぬ妙文だと思ふ。尚、「文反古」に、西福寺食客時代の描写がある。木条とあい通ずるものがあるから左に引用しよう。

―此二日は寺に里人集り来て、一年のをこたり事どもかうがへ測ぶとて、御堂のつつみ眺おそしと鳴らす。三たびの後にぞ集ひて此日の弁に当れる家より、いと大なる平鍋に、気のめうめうと煮りたちて、かんばしきを荷ひもて来る。汁の物とぞいふ、大根・芋の子煮たらしたり。さて門なみの人々、手々に平折敷に赤はけたる櫛に、飯高々と盛りて、つけ物の平皿、窪つきなど、何をかこぼるるばかりにささげ来る。すこしよろしき家なるは、刀自うばら小姫らが、大事と運びつれて、我たのむ人にそなへてかへる。凡二、三十人、答喝らしたててくらふさまいと賑はし。人々あかぬままに食ひみちて、又おのが家に運びかへす。(下略)

④借剣の剣の字、木版本および写本には金篇に刃の字が用いてあり、温知叢書の外は、国書刊行会本、有朋堂文庫本、名著文庫本など何れも「刃」の字をあててあるが、これは現行の活字に金篇に刃の字があまり用いていないための全くの誤植であろう。この金篇に刃の字は康熙字典によれば「入質切、音日、鈍也」とあるから、剣とは全く別文字である。尤も北宋時代の「集韻」に「劍俗作レ劍、非是」とあるから当時から混用の例があったと見える。日本でも今昔物語には金篇に刃が剣の代りに頻用せられ、室町時代の「字鏡集」にはこの兩字を同様に釈しているし、文明十九年作の備前長船の銘

刀にも「殺人刀・活人劍」の劍が金篇になっているから、この書でも意識して金篇のを使ったことは明らかであろう。

⑤「すすばな」は、木版本には「すすばな」、写本には「すすばな」、名著文庫本には「すすばな」、刊行会本、有朋堂本、笑話集は何れも「すすばな」となっている。これは和名抄に「淡、和名須々波奈、泉液也」とあるのを様々に読み伝えた結果であろうが、大言海に「すすばな、泉液の垂るるを泉思にて喚る如くすること」とあるのを採る。

〔第十三段〕(人の思ひものなる女)

○昔、人の思ひ者なる女ありけり。或ち縫ふわざよりして、手などしをらしく書きすさみ、和歌は二条家の流れを学び、糸をかくし掻き鳴らし、茶かきたて、香たきくゆらしなど、何わざにも並々ならざりけり。

その頼みつる人は、世の常の人にて、道々のあはれをも知らず、ただ朝夕酒くみ遊び、めぐりなど手まさぐりして、露も物の心なき人なりければ、よろずおとしめられて、まめまめしく言ひ語らふべくもあらず、いとたのもしげもなく、年月思ひ暮しけり。この主の宿の妻は、心さがなくて、時々ねたましきこと言ひおこせ、事につきては恐ろしき心ばへども見せつつ、辛さのみ思ひ知らせければ、わが身の上、今ははかなくのみ思ひなされて、仏の道かりそめならず思ひしみて、経読み花摘み精進せうじんなどして、行ひけるほどに、これもまた主の心にかなはぬ由にて、あいなく罵られ、さては道に入るべき時こそ来たるなれとて、遂に髪を切りて、ここを遁れ出でにけり。

さる心は、世を離れたる庵住みして、松の嵐、寛の水の音に、心を澄ませつつ、思ひのままに念仏して、後の世頼もしからむをと、古き物語さまに身をばやつせしに、ことたがひて、師と頼みたる尼の、心かたましく、今よりかく尊とげにては、修行にあらざとて、もて来し袈裟・衣・小袖までおはかたに奪ひとりて、あらあらしく身に添はぬ麻木綿の、糊さへいとこほしきに取りかへられ、菓つみ水汲み、托鉢などは、修行のならひなるを、物興るる檀家へは、さもしげなる重のうち、絶えず持ち運ばせ、男僧の夏冬の物の解き洗ひの賃仕事、夜昼いとまあらず、人の陰口、見聞くままに言ひ散らし、嫁取りの仲だち、産家の夜とき、不義娘の預りものなど、うき世の事にのみ、かかづらひつつ、朝夕の誦経の外は、何を仏の道に入りしともなく、いと浅ましき世界に迷ひ来ては、また此処をも遁れ出でばやの心しきりなるにぞ、なかなかに在りし世の恋しくもなりぬる事よ。遂にこの庵室をもうとんじ出でて後は、そこと頼むべきかげもなく、さまよひ歩くほどに、はじめの道心もいづちにか醒めはてて、手か歌詠みし昔は、夢の浮橋かけ絶えて、春さむいと、秋何とやらいふに堪へかねて、遂に恐ろしき肝煎娶にかどはかされ、ある遊里へ夜ばかり人目を忍ぶ尼出の苦界、四尺餅子の浅黄さくら、この春ばかりの果築か、はては何がしの院の把針者とは、たしかそれちやと、見し人の語られし。

○(原注)「めぐり」とは楊柳遊なり。大和物語に、博奕をしてといふたぐひなり。

○(原注)「せちみ」は今の精進のことなり。節忌と書けり。

○(原注)深草の野への核し心あらば此春ばかり果築に咲け。

○(原注)「把針者」は僧房に入りてたちぬふわざをするものなり。後世梵妻を兼ねるなり。

〔注〕①めぐり||めぐりガルト(捲り骨牌)又は、めぐり札(捲り札)のこと、賭博の道具。広辞苑によれば、「ウンスンカルタ」から「花ガルト」へ、移って行く途中に江戸後期にはやったカルタで、四十八枚から成り、花ガルトのように合わせて行き、役が色々あったという。「めぐり」が正しく、「めぐり」と濁るのは上方方言だろう。

大田南畝の「半日閑話」安永五年十二月の項に「この頃敷へ歌の童謡大に行はる」として「三ツとや、三浦三崎ちや綱を引く、おいらの裏では花札引く」云々と見える。

②産家の夜とき||頼まれて終夜産婦の傍に侍し慰める役。「柳村」に、「産のとき口が動くでもてたもの」

③夢の浮橋かけたえて||夢のように遠い過去となつてしまつて。夢の浮橋は、昔、吉野川に「夢のわた」という所があつて、そこに渡した橋の名であつたという。夢ははかないものであるから、夢を夢の浮橋というようになった。「かけたえて」は「掛け絶えて」か「掛け絶えて」か、何れにしても夢のように消えることとて空想が現実によつて破れる意となる。(補説を見よ。)

④秋何とやらいふに堪へかねて||今よりは秋風さむくなりぬべいかでか独り長き夜を寝む(家持)といったような怨情を指すのであろう。写本には「秋さびしきに堪へかねて」とあつて意明らかである。

⑤ 尼出のくがいニ尼姿で客に接する遊女のつとめ。苦界は又苦海とも書き、苦痛の世界の意をもつ仏語であるが、俗に遊女の苦しい勤めの境涯を指し「苦海に身を沈める」などという。池田弥三郎著「日本故事物語」にくわしい。(なお補説を見よ。)

⑥ 四尺帽子の浅黄さくらニ浅黄色の四尺帽子をかぶつて席に出たのを浅黄桜としやれて次の句へかかろ。(補説を見よ。)

⑦ 此春ばかりの墨染かニ原注にある通り、古今集、上野峯雄の歌から引いた句。美しい桜花(美人)が悲しい運命のために、此春だけ、墨染の色(尼姿)に咲き出でたのか、しほらしい容姿であるよ。「住め初め」と「墨染」とを掛けた詞。桜の一種に浅黄桜・墨染桜がある。

〔補説〕①「女の一生」という小説の題目を思わせるような深刻な感じを読者の胸に刻みこむ名文である。寄るべのない一人の女性が、道を求めてとぼとぼとさまよひ歩くうちに、あさましい現実の大きな手に、びしやりとたたきめされる残酷さが描かれている。作者はできるだけ冷静にそれを述べてはいるが、心の底に燃える憤りは自然と感じとられるであろう。

② 小林歌城は本段の二ヶ所に源氏物語を暗示している由を注しているが、いかにも「恐ろしき心ばへども見せつつ」のくだりは、桐壺を連想させる句であり、「古き物語さまに身をやつせし」は浮舟の出家を暗に指しているであろう。そこで、「夢の浮橋かけたえて」の句が生きて来るのである。

③ 「尼出」について、温知叢書には

尼出は尼出身のこと、突き出しの時、この由、茶屋々々へ小札に書きて配ることあり。

と注し、又、「浪花聞書」にも、

新造出の時茶屋々々へ置屋より配る名前書付けを差紙ととなふ。

本むく素人・腰元出・後ろ帯(眉毛あるもの)若菜(遊女の名)

何屋(置屋の名)などと認めあるよし。

と見える。ここでは尼出身を意味する外、「人目を忍ぶ」云々、

「四尺帽子の浅黄桜」云々という句から考えて、現在の尼姿をも指しているのである。

④ 四尺帽子については、それがどんな形のものかの的確には知り得ないが、本背第二十二段に「四尺帽子膝すぐるまでうち垂れ」とあるのから、長く垂れた帽子であろうことだけは想像がつく。なほ文政五年刊本には右の第二十二段に該当する挿絵があるから参考するとよい。これは老人ゆえ、膝すぐるまでと言ったのであろう。

〔第二十段〕(何くれとよく偽はる浮かれ女)

○昔、おのが為にもならぬことまで何くれと能くいつはる浮かれ女ありけり。ある男の田舎に行くとして暇乞ひしに来りければ、この女、さらば馬のはなむけに小袖ひと重ねして贈り奉らん。夜寒をしのがせ給はんには、おのが思ひを添へてこそと云ふに、男、われに物かづけ給はらば、札よく縛したる銀一領たまはれと云ひければ、それとても御心のままに添るべし。何の料にとて、かく恐ろしげなる物をもとめ給ふと問ふに、君が鉄砲をうけん為なるはと言ひけり。いと口がしこき男になんありける。

○(原注) かづけ物とは衣服の類を人の呉るをいふ。さて、それには見てくれのみにて悪しきもあるより、かづき物といふは眞語か。

○(原注) 上古は空齋といひ、中世は鉄砲といひ、下世には太平楽といふを、略して大とのみいへり。

〔注〕①ものかづけ物カヅケモノを贈ることであるのは言うまでもないが、原注で「見てくれのみ」で粗悪な贈物を「かづき物」というのはその転語かと言ったのは手痛い皮肉を飛ばしたのである。

②札よくおどしたる鎧カウロは長さ二寸乃至二寸五分、幅六分乃至一寸二、三分の革または鉄の小板で、これを数多く重ねて牛革を以て横に綴じ、更に鹿のなめし革又は粗糸を以てタテに綴じて鎧とする。即ち上質の札を頑丈におどした上等の鎧の義。

③君が鉄砲をうけんためカウロ貴女の嘘を受けとめるため。但し、嘘を受けとめるでは全く意味をなさなくなる。此處の鉄砲は虚言のことで、虚言を俗に鉄砲という故、鎧で受けとめようといふところカウロに此の洒落の生命があるのである。虚言や法螺を鉄砲とも空鉄砲とも、地方によっては大砲とも空大砲ともいふ。蓋し、放し方(話し方)が仰山で人を驚かすが、あとが臭いという洒落からであらう。昔の狂歌にも、

○語口聞きて笑はぬ人もなしさてきて臭き鉄砲の音(雄長老百首)

○いつはりと思ひながらも鉄砲のはなしに肝をつぶしぬるかな(後撰夷曲集)

○アガタ支証なき手柄をばなす音をこそ空鉄砲と人が言ふらめ(吾吟我集)

などに見える。(漢語辞典による。)

原注の「太平楽」は「大阪詞大全」に「自慢すること」とあり、「てつぼう」という處は大阪四國を初め全国に少なくない。(全国方言辞典参照)

又、原文には鉄砲の砲の字を火篇に包とあり、この字は原来「あぶる」義であるけれども当時「砲」の代りに慣用せられた。

〔補註〕①第十四段「世に見知らぬをばよく見わかかつ師」と共に気の利いた皮肉を披った好箇の笑話である。この「くせものがたり」を笑話集の中に入れたり、滑稽本として扱ったりするのは、こうした章が目立つからであらう。この掌篇を現代風に移したら、

女「寒いところへ御転任ですってね。じゃ、毛皮のチョッキを御餞別してヨ。」

男「どうせ呉れるんなら新式の防弾チョッキに願いたいね。」

女「おや、そんなに物騒なところなんですか。」

男「なあに、君のバチンコの方がこわいやつさ。」
ともなろうか。

〔第二十三段〕(人の遊びの座に出でてよく心をとれる男)

○昔、人の遊びの座に出でて、よく心をとれる男ありけり。こは、もろこしにては辯問と呼び、この國にてはたいこもちとも弁慶とも云へりけり。これらも昔ありしは、これぞと面おこしなる芸もあらねど、

ひたすら人の心にたがはじとのみ用意せしかば、色里のみにあらで、
月花の宴、または伊勢参宮、吉野山ふみなどにも召し連れて、物よく
まかなひつつ、ただ快からむ事をのみ努めたるなりけり。また、良き
人の子の、家を失ひて世に頼りなく、もとより好ける道とて、さる遊
びの座に出でて、興を助けけるに、それらは扇子のひと手、笛、つづ
み、糸竹、茶かき立て、香くゆらする事にもたどたどしからず、よ
ろづに事馴れ、立ち振舞さわがしからずてめでたし。やや降りての世
なるは、ひたすら、歌舞伎ものの声色・身振のみやつすを、芸とす
るに至りては、良き人の子はせず、板もとの喜八、廻しの伊助など、
声色二つ三つ習ふより、座にをどり出で、いかにもいかにも興あらむ
とする程にいと騒がしく、頭痛き心地ぞせらる。

それが中にも、老いたるは見世借り芸子、雇はれ中居などと雇し
て、路次の奥、清らかに住みなし、よろづつましく娘のかたなりなる
をも、糸の音色なつかしきばかりに教へ立て、それに助けられて終り
をよくするもあり。又、時を得たるは、茶屋・揚屋に成りのほれるも
ありき。

なべて昔の如く物むさばりても、やがて手を空しくするはまれまれ
にて、泥の如く酔ひても、著たる衣のいたはり露忘れず、大師巡り・
妙見・主夜神・赤山・関帝などに絶えずあゆみを選びつつ、身の末の
幸ひあらむことを祈るに、昔の良き人の子なるは、さること思ひも寄
らず、盃の流れに沈みて、身に病苦の入るをも知らず、如姉・芸子の
密かに情あらむことをのみ心底に願ひつつ、果て果て如何ならむとも
思ひたどらずなむ。

また、若き医者など、ひたすらに服ればみて、われを粧とも通とも
思ひほこりては、揚屋の台所酒・楽屋のすっぱん汁に、うたてきまで
うち解けたる、いとあさまし。これは医者のみならず、なべて芸道
もて世を渡る人には多かるべし。親の家藏なくしてのあり、もとの身
より成り上れるあり、また、うはへは如何にも遊び好きと見せて、下
の心恐ろしく、妾宅の斯ひかた、揚屋私ひの取次ぎに、一わりを
外にも、時々付け届けをあてことの中宿は、三八の釜日に手取り鍋
の卓袱もどき、何かと小手の利く賢しさ。その人々の心々はその為す
所によりて見んに、かれいかでか庚哉、かれいかでか庚哉。

○(原注)「弁慶」とは、財主を判官といふに對せるなり。たいこ
持といふ事、その語目の起るところ未だ考へず。後の君子を待つ。
○(原注)「老いたる」とは老衰にあらず、功を積みたるをいふな
り。

○(原注)「雇して」とは、宿ばひりの意なり。

○(原注)「かたなり」とは面貌十分ならぬをいふ。物語どもにも
見えたり。

○(原注)咲く花に思ひつく身のあちなきさ、みにいたづきのいる
も知らずて。

○(原注)論語に、觀其所由、察其所安、人焉廋哉、人焉廋哉。

【注】①たいこもち遊興の主人公を大尽と称するところから大神と
見立てて、之に近侍して相違をうつ故、太鼓持ちたという説より
も、六斎念仏の証持ち・太鼓持ちから起つて、金持ちに陪するか
ら太鼓持ちたという方が尤もらしい。

②弁慶Ⅱ浪花聞書に「色里の太鼓持ちをいふ。大尽をほうぐわんといふ故、判官に付きものの弁慶なり。」とあり、騷旅漫録には「那の糸頭(タイコモチ)を判官といふ。略してぐわんとはばかりもいふ。岡場所の糸頭を弁慶といふ。」と見える。

③扇子の一手Ⅱ踊の一手。扇子は踊りを代表している。

④板もとの喜八Ⅱ板元は調理場又は調理人を指す。ここでは料理人の喜八。徳和歌後万載集に狂歌師「板元伊八」の狂名が見える。

⑤まはしの伊助Ⅱまはしは娼家で遊女の監督をする者。この喜八、伊助は、在り合わせの名を拾った所謂通名で、百姓に権兵衛・田吾作、職人に熊公・八公といふのと同じ。

⑥見世かり芸子Ⅱ芸子は女芸者のこと。茶屋に身を寄せて自分立ちの営業をするもの。

⑦厭はれ中居Ⅱ京阪でいう中居は特に遊女屋料理屋の女中のこと。茶屋の忙しい時雇われて助(すけ)に行くのを業とする中居。今「やとな」という。

⑧路次Ⅱ京阪では横町のことをいう。

⑨茶屋揚屋Ⅱ何れも遊女を揚げて遊ぶ家だが茶屋は下級の遊女を扱うところ。

⑩大師めぐりⅡ弘法大師の八十八ヶ所の霊場を巡拝すること。

⑪妙見Ⅱ妙見は菩薩の名で本地は北斗星、所作奇特で国土を擁護するといふ。妙見堂は到る所にあり、京都府管内の公簿に載っているのだけでも五十六七はあるといふから推して知るべしである。

然し此所には有名な能勢の妙見堂(大阪府)を指すのである。

ろう。

⑫守夜神Ⅱ又、守夜神とも書く。仏法守護の神であるが、俗に夜間を守る神として悪夢の禁厭に験ありと云い伝える。(なお補説あり。)

⑬赤山Ⅱ赤山明神と称してもとは新羅の神であらうという。比叡山の西麓、修学院町に祀られてある天台宗の守護神。仁和四年延暦寺座主安慧の創建にかり赤山禪院と称した。中国山東省赤山法華院の山神である太山府君(たいさんぶくん)を勧請したもの。平家物語卷一、源平盛衰記卷十に赤山の名が見える。大田南畝の「一語一言」によれば、知恩院の御忌の法則にセキサンと澄んで読む由。又、馬琴の騷旅漫録に「近年京にてはやり神は赤山明神と深砂大王なり」云々と見える。(補説あり。)

⑭関帝Ⅱ中国の三国時代に名高い蜀の豪傑関羽を祭った廟、関帝廟。(補説を見よ。)

⑮身にいたづきのⅡ原注の歌は古今集の序にあるのを引いたのであるが、この歌は拾遺集卷七に大伴黒主の詠として出ている。

⑯粹(すい)Ⅱ世の中の欲楽も苦勞もよく経験して、人間生活の表裏によく通じて居ること。殊に遊里や遊興の事情に明るくて、万事に濃厚ならず、思いやりがあつて洒脱であること。洒落本には「物知」とも書いてある。

⑰通Ⅱ粹とは同じであるが、質がやや劣る。すべて物事に通曉していること。

⑱揚屋の台所酒Ⅱ揚屋の台所で酒をのむこと、通人のやることであ

る。

⑩楽屋のすっぱん汁 楽屋は歌舞伎などの舞台うしろにある仕度部屋。すっぱん汁は亀の一種で非常に美味なものである。楽屋で慰勞のためにするすっぱん汁。これも通人のやる仕業で、秋成「諸道聴耳世間猿」に「楽屋見舞のすっぱんのたき所」（四の二）と見える。

⑪もとの身より成り上れる 従來の境遇よりも身代をふやした。

⑫妾宅のまかなひかた 妾宅へ仕送るお手当の取次ぎ。

⑬時々の付届けをあてことの中やど 時節々々の謝礼をめぐめてに世話をする中宿。中宿は男女密会のための宿。柳村に、

中宿へお袋の来る一大事

中宿は義理で勘当二日置き

中宿は睨まれて居る蔵を建て

借戎の余慶中宿二日置き

使はずに居ると中宿意見する

⑭三八の釜日 月のうち三日と八の日に茶の湯の弟子を集めて釜を立て積古するを云い、六斎日ともいう。

⑮手どり鍋のしっぽくもどき 手どり鍋は手のついた鍋のことであるが、ここでは「小鍋立て」の意で、自分で煮たきの小料理をすること。しっぽくもどきは、しっぽく料理の真似。しっぽくは原來中國風の食卓の義であるが、こは、しっぽく料理を指す。我國でいうのは、蕎麦・餛飩の汁に蒲鉾・椎茸・野菜などを加えた料理。

⑯かれいかでか興哉 原注の文は為政篇にあり、その人の行動を見れば如何はと本性を隠そうとしても、よくあらわれるというのである。

〔補説〕①この段は辯論論を中心とし、延いては一般の芸人氣質について痛論している。芸を売り、ひたすら遊客の機嫌をとるのが本務であるべき辯論が、おのれの分際を忘れて下卑た根性をさらけ出し、利に走るのを憤慨するのである。社会のあらゆる世相に不満を感じ、一切がその本道をはなれて浅薄になって行くのを「世の末またいかならむ、いと覺束なし」と痛歎したのと同じ心情なのだ。

まず、昔の辯論をのべてその芸に対する専心三昧の態度を讚美する。ひたすらに客の心にたがわじと努める神妙さ、落ちついた身のこなし、奥床しい嗜なみの数々、さりながら、辯論の身であれば物をむさばる、むさばりながら片端からパツパツと使いはたして徹聖も野暮氣を残さぬ徹底的な芸人氣質、それが秋成には嬉しいのである。翻って今の辯論なる者を見ればどうだ。役者の声色身振りが出々の身上で、それも洗練された看板芸なら我慢もできよう。板場や座敷廻しの若い衆が、褒美はしさの出来心から、声色の二つや三つ習うが早い、いきなり座敷へおどり出るに至っては、正に言語道断、しかも、こんな連中が、うまく仕上げて小じんまりした安楽生活にはいるのを見ると、全く以て泣きたくなる。五十にして天命を知れりと称し、舞台を引退してオホンと取りすまず歌舞伎役者（第四段参照）が「つらら怕いと同じ意味で、「泥の如く酔ひても着たる衣のいたはり忘れぬ」下司根性で、大師巡りや妙見信心に身の行末を

折りまわる生意気さが、滅法煩なのである。

こうした暫間論の余沫は、若い医者の自称通人や、金もうけ主義の芸人たちへと飛んで行く。医者は医者らしく神妙に病人の脈の見方に苦勞するがよし、揚屋の内儀に鼻つままれながらの台所酒やら、かげで舌打ちされるのも御存じなしの、楽屋に大あくらのすっぱん汁などは、年が若いとは云え何という浅まきだ。すべての芸人もそうだ。さらに粋とか通とかの面影もなく、せつせと小ぜにを溜めこみ主義の、三八の釜日に、追従たらたら手とり鍋のしっぽく料理を運び出す顔つき、へとを吐きかけてやりたい程の醜態。

要するに今の世には、粋も通も地を払っている。芸人の忍気も振りも消え失せて、悉く愚だ、俗だ、末法だ。……痾癖家秋成は眞赤に昂奮してこう叫ぶのである。

②この一段を読むと、すぐ心に浮かぶのは、「諸道聴耳世間猿」に描かれた鼓打与左エ門の挿話である。同書二の巻第三話に「呑こみは鬼一口の色茶屋」という題で、江戸深川の鬼の喜介というやもめ茶屋があつて、そこに朝夕入りびたりに通う鼓打ちの家鳥与左エ門、もとよりしがない端た芸人の身ゆえ、金もつつかぬのに徹底した遊びようで、遂に借銭の首がまわらず、家を売払って何処かへ雲がくればしましう。鬼の喜介は承知せず、居どころは大概知れているとばかり、柳原の古手屋の裏路次に幸田喜兵エという狂言師を訪ねれば、主人の喜兵エは寒中に古拾、与左エ門は丸はだかだ、挟み箱用の掩い合羽に首だけの孔をあけて着こんでいるという態だらう、あまりの貧乏さに流石の鬼も呆れはて、幾百文を合力してかえる。

「兩人はおどり出で、かの百領をさきげつつ、喜兵エの音頭に与左エ門がめつた踊り、しばし奏でつつ餅酒にかえ、一時の機嫌上戸、ほめきの中に侵入りしは、楽しみ其の中になきにしもあらず。献上鯛一枚が百両もする花のお江戸に、これ程の落武者もあるに違ひなかりし。心からこそ身は丸はだか、そこが芸者根性と面白がるも程あるべし。」

と、秋成自身もまた呆れかえつたように書いてはいるが、この徹底ぶりに心から敬服している筆の匂いは、それと明らかに嗅ぎとられるであろう。この与左エ門、持って生まれた鼓の音を借しまれて、さる御大家へお抱えになったことがこの末に面白く語られている。まことに好箇の芸人氣質物語で、作者にとつても特に念心の作品だつたに違ひない。

③胆大小心録にも暫間を論じた一節があつて、「太鼓持といふも、扇の一手も舞て、小鼓あしらふて、花見の供につれらるものぢやあつたが、まだ若い時までもあつたことぢや。今のは男ぶりを見るど、なんともたとへやうのないものぢや。」

と、この方が晩年の無遠慮な言ひだけに、言簡にして痛罵骨に徹するといつた所だ。馬琴の馬旅漫録(百十七ノ下)に、「京も大阪も暫間は一席するに堪へざるものなり。暫間は羽織も着ず。鳥の内の暫間に音八といふものあり、これは狂又発句など少しできるなり。又、新町に亦助といふ暫間あり、面をよくす。その外は無芸大食甚だいやなるものなり。」云々とある。

④主夜神は詳しくは嬰調嬰演底主夜神といつて、善財童子五十三番の

うち第三十一に位する普智識である。この神を日本に始めて祭ったのは慶長十六年浄土宗の僧袋中が京都三条の橋畔に法林寺を創建した時、この神が示現して念仏の行者を守護し所願を満足せしめようと告げたので、示現のあった十五日を縁日としたのだというが、中国の西陽雜俎には悪夢を守る呪神としてある。今、大阪市東区小橋寺町成道寺に祀られてある主夜神が有名で、元来は水難除けに御利益があった由であるが何時ごろからか盗難除けに変化して流行しているという。

⑤ 赤山明神の起りのことは慈覚大師自記の入唐求法巡礼行記の中に見える。初め大師が入唐して求法の志いまだ全く遂げず、しかも一まづ帰朝せねばならぬようになり、その途中雞風にあい山東の登州のさかいにつく。ここで意を決して船を下り、その州の赤山法華院にいたり祈願して当所の山神の冥助を請い、求法の本願を遂げしめらるるならば本国に帰るの日に神院を建立せんと誓った。のちその願を果たして帰朝したが大師の生存中には右の誓を果たすことができなかったので、示寂にのぞみ遺言して之を果たさしめ仁和四年にいたって成就したのである。

⑥ 関帝廟は中国内地には各地にあつて俗に老爺廟といい、又、文廟に対して武廟ともいう。日本では現在大阪市天王寺区勝山通黄葉宗清淨院に祭られてある関聖帝君というのが最も有名であつて、今より百六七十年前、福州府福建の人、林氏、大成和尚の開基であるといふから、秋成時代の関帝廟も恐らくここを指したのであろうか。尚、同廟は在日の中国人が開運伏魔を主願とし、その他人間一切の事悉

く聞入れてもらえらるという信仰を以て信心しているという。
(この講座はあと一回で終ります。)